



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『デ・アニマ』B1におけるアリストテレスの身体理解
Author(s)	茶谷, 直人
Citation	哲学, 41, 21-42
Issue Date	2005-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35031
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_RP21-42.pdf



『デ・アニマ』B1における アリストテレスの身体理解

茶谷 直人

1 はじめに

『デ・アニマ』B1で提示される魂の定義は、B巻の論考の端緒にして核を成し、しかもその意義がしばしば問われるものである。解釈上の議論は、身体を質料にして可能態として、そして魂を形相にして完成態として特徴づけるアリストテレスの立場を如何に理解すべきか、ということに関わる。特に近年、心の哲学という問題関心の中で、彼の心身の位置づけが二元論とも還元主義とも一線を画すものとして注目される一方、現代的議論との断絶を指摘する論者もいる。² こうした論争で焦点の一つとなるのが、果たして彼の身体理解は現代的文脈と同列に論じ得るのかという問である。そしてこの問との関連で解釈上しばしば問題となるのが、生きていない身体は厳密には身体とは呼べないという「同名異義原理」と呼ばれる主張（e.g. 412b20-22）と、身体を可能態として特徴づける魂の定義との関係をめぐる難問である。即ち、身体は一方では常に「現実には生きている」とされながらも他方では生の「可能態」として位置づけられる、という独特な身体観に関し、整合的理解が求められる。そしてこの難問からの一帰結として、現代的議論との断絶を見る解釈が生じることになる。³

この難問は、(1)それ自体解釈上の解決が求められるのみならず、(2)心身問題という文脈においてアリストテレスの身体観を如何に理解し得るか、という一般的問題を喚起する。私は別の機会に(1)に関し一定の解決案を提示したが⁴、本稿ではこれを踏まえつつその発展形として、(2)に関し一定の知見を提示することを目指す。そのさい、(1)の作業を圧縮的に敷衍しつつ議論展開するという手順を踏むことを断っておきたい。というのもそれは、テキストの難解さが要求するものであるのみならず、まさに(1)の解決プロセスに依拠して(2)が段階的に明らかになって行くと思われるからである(その所以は以下を読み進めてもらう他ない)。今見通しのみ予示しておけば、B1において見出される二つの身体理解のあり方(特に*organikon*と特徴づけられる身体理解)が重要なポイントとなると思われる。さて、まずは基礎作業としてB1における魂の定義にいたる議論の構造を確認したうえで、その内実分析を加えたい。

2 魂の定義にいたる議論の構造

まず、魂の定義にいたる一連の議論を分析する。B1でアリストテレスは、「魂の最も共通な説明言表は何か」(412a5-6)と提題したうえで、実体の三義として質料(可能態 *dynamis*)、形相(完成態 *entelecheia*)、質料と形相の結合体というお馴染みの区分を提示する(412a6-10)。そして完成態と「自然的物体 (*phusikon sôma*)」の分類に関する諸前提を経て(412a10-19)、魂を「可能態において生命を有する自然的物体」の「形相としての実体」(412a19-21) これを Def.Aとする⁵) として「第一の完成態」(412a27-28 Def.B) として、*psûchê*には「*organikon* な自然的物体の第一の完成態」(412b5-6 Def.C) として定義する (*organikon* の内実の後で検討する⁶)。一連の議論は非解説的であり、彼の哲学ではお馴染みの概念装置(自然、実体、形相/質料、完成態/可能態)が既に了解済みのものとして導入され分類的に議論がなされているため、難解さを伴う。そこで、一連の議論構造をその明確化のため定式化した上で分析を試みたい。その

さい、理解を補うため、『形而上学』の関連議論、および自然哲学の中心的論考である『自然学』B巻を主に参照する。特に後者は、その自然哲学原論的な性格からして、また執筆年代を比較的初期のものとする一定の共通理解からして、分析を補完する有力テキストだと言える。一連の議論はこう定式化できる。

〈前提A〉〔実体 (*ousia*)〕の区分

実体… (O1) 質料 (可能態) (O2) 形相 (完成態) (O3) O1とO2の結合体

〈前提B〉〔完成態 (*entelecheia*)〕の区分

完成態… (E1) 知識「の所有状態」(*epistēmē*) に比せられるそれ

(E2) 知識の実際の行使 (*theōein*) に比せられるそれ

〈前提C〉〔物体 (*sōma*)〕の区分

〔物体〕≡〔実体〕にして〔質料〕(基体)

(S1)「自然的」(*physikon*)物体 (≡S2の「原理」(*archē*))

(PS1)「生命」(≡自らによる栄養摂取や生長、消滅)に与る (*metekhein*) 自然的物体」即ち

「生命を有する」(*echein*) 自然的物体」(i.e.「生物」)≡結合実体 (O3)

(PS2) 生命に与らない自然的物体 (i.e.無生物)

(S2) その他の物体

〈前提Cからの結論(C)〉 魂≠物体

《前提A、C、Cからの結論》

Def.A: 魂 (以下 Ψ) $\equiv$ 可能態において生命を有する自然的物体の形相としての実体

〈追加前提 (前提D)〉 $\Psi \equiv E1$

《Def.Aおよび前提Dからの結論》

Def.B: $\Psi \equiv$ 可能態において生命を有する自然的物体の、E1としての完成態

〈追加前提 (前提E)〉 「可能態において生命を有する自然的物体」 $\equiv$ *organikon*

《Def.Bおよび前提Eからの結論》

Def.C: $\Psi \equiv$ *organikon* な自然的物体の、E1としての完成態

推論の基本構造を確認する。「生命を有する自然的物体」(PS1) は生物を意味するとして、前提Cでは、「物体」は質料であり ($S \equiv O1$)、PS1は結合実体であるとされ ($PS1 \equiv O3$)、前提Cでは「魂は物体でない ($\Psi \neq S$)」とされる。とすればこの推論では、「(魂そのものではなく身体を伴う) 個々の生物がO3であり、一方物体 (有機体の場合は身体) はO1であるから、魂は残るO2に他ならない」という語られ方をしていることが解る。即ちアリストテレスはまず「魂は何らかの実体である」ことを暗黙の大前提とした上で、それはO1、3のどれに相当するのかを問い、「O1でもO3でもないからO2である」という手順でDef.Aを導いていると思われる。そして前提E、Dの順次追加によりDef.AをDef.Bに、Def.BをDef.Cに換言している。

3 「自然的物体」としての身体

次に諸前提で提示される各概念と区分の内実を探る。前提Aはお馴染みであるし、完成態の区分（前提B、D）は少なくとも類比的には理解可能であろう。一方確定が必要なのは、前提Cで詳述抜きに提示される「自然的物体」の内実そしてS1とS2、PS1とPS2の区別の意味である。

前提Cの「自然的物体」（S1）は何を意味するのか。それには、それが「その他の物体」（S2）と区別されS2の「原理」とされることが手がかりとなる。即ち、非自然的事象として技術的事象を挙げそれと比較しつつ自然的事象を考察するという策は、自然哲学でお馴染みであるからして、S2の典型は技術品であると思われる。とすればここで参照が有益なのは、この種の考察を駆使する代表的論考でありしかも「自然とは何か」が論じられる『自然学』B1である。そこで彼はまず、諸存在を「自然によるもの」と「その他の原理によるもの」に区分し、「自然によるもの」として、「動植物およびその諸部分」と「四元素」を認めた上で、「自然」をそれらの生成の自体的内在原理として規定する（192b8-23）。一連の議論のうち、前提Cと関連する事柄が二点見出される。即ち、(a)彼は「その他の原理によるもの」の典型として技術品を想定しつつ両者を比較検討していること、そして(b)「自然によるもの」として彼が認める「動植物およびその諸部分」と「四元素」の区別（192b9-11）をめぐるものである。

まず(a)を検討する。「自然によるもの」と「技術によるもの」を区別する決定的点は、動植物およびその諸部分と四元素においては変化の原理が当のものに内在する一方、技術品においては外在することにある。彼は、自然によるものには変化の生来的衝動 (*hormé* 元素の傾向性) が備わるとする（192b16-20）。四元素は、動植物およびその諸部分においても質料的側面の基本的構成要素となる。というのも生物にとっては身体全体が、身体全体にとっては異質部分（手足や内臓などの器官）が、異質部分にとっては等質部分（筋肉や骨など）が、等質部分にとっては四元素が、それぞれ

質料的側面だからである (GA. A1, 715a9-11)。つまり「自然によるもの」は全て、質料として分析される限りは、熱冷乾湿という本性を有し一定の混合配置から成る一定の元素としてあり、それらの物理化学的作用により運動することが解る。一方、技術品には衝動が備わっていない。無論ベッドも一定比の元素から成るが、それは睡眠という目的のため制作者により外的に賦与されたものである。よって、ベッドはベッド（睡眠のための技術品）としては衝動を有さない (196b16-19)。ただし技術品もその形相的側面が捨象され質料的側面のみが観察される限りは、一定の材料（究極的には一定元素）から成る。技術品もその意味では元素の衝動を有すると言える (196b19-20)。以上の区分を踏まえれば、前提CにおけるS1とS2の区分はそれと連続的に理解できる。即ち、S1とS2の基本的差異は原理の内在／外在という違いに存し、どちらも元素を質料的要素とするもののS2の元素配置は外的に賦与されたものである。ただしS2の技術品も質料的側面を要素還元的に特定する限りは一定元素の衝動を有し、その意味ではS2もS1であると言い得る。S1がS2の「原理」であるという表現の含意は多様であり得るが、その一つの柱としては、S1の質料的側面の基本である元素の生来的原理があらゆる「物体」に浸透しているという事態が踏まえられていると思われる。

再び『自然学』に目をやり、次に(b)を検討する。「自然によるもの」として認められるのは、「動植物およびその諸部分」と「四元素」であった (192b9-11)。これらの区別は、「形相としての自然」と「質料としての自然」という自然の分節に連続する。形相的自然は、自然によるものの形式であり本質を表す説明言表である（そして『デ・アニマ』では魂に相当する）ところの自然であり、一方質料的自然は、自然によるものに常に基体として内在し四元素を究極的要素とするところの自然である (193a28-31)。注意すべきは、「自然によるもの」が「動植物およびその諸部分」と「四元素」のみであるということは、それ以外の無生物や自然現象が「自然による」と言えるのはそれが一定元素からなる（即ち質料的自然が内在する）限りにおいてであることを意味する、ということである。とすれば結局形相的自然を有するのは「動植物およびその諸部分」のみとなる。以上を踏まえ前提Cに目をやるべきとき看取されるのは、PS1（生物）

とPS2（無生物）の区分の意味である。即ち、これらの区別は「動植物およびその諸部分」と「四元素」の区別、そして形相的自然と質料的自然という分節に連続すると思われる。というのも、一方形相的自然が生物にのみ見出され、他方質料的自然が元素を基礎とし、しかも無生物は質料的自然を有する限りにおいてのみ「自然による」とすれば、PS1は形相的自然と質料的自然を、一方PS2は質料的自然のみを有する存在として特徴づけられる。ところでPS1もPS2も「自然的物体」であり、両者の差異は生命の有無に存する。とすれば、「形相的自然を有すること」はまさに「生命を有する（魂が内在する）」点に存し、一方「質料的自然を有すること」は「自然的物体である」点に存することにろう。そして、S1とS2の区分の背景には自然と技術の差異があり、しかも「自然による」という特徴づけの基本的視座が元素の衝動にあることを先に確認した。そして前提Cでは、「生命を有する自然的物体」が結合実体であり、魂は物体（質料）でないと言われる。すると、以上を総合しつつ実体の三区分に当てはめれば、前提Cで語られる「生物」は、

質料と形相の結合実体Ⅱ「生命を有する／自然的物体」Ⅱ生物

生物の質料的側面Ⅱ「自然的物体」であること（質料的自然を有すること）

生物の形相的側面Ⅱ「生命を有する（魂が内在する）」こと（形相的自然を有すること）

と分節されよう。注目されるのは、この場合「自然的物体」が生物の「質料」となる点である。「自然的物体」は元素の作用を基礎とする質料的自然の内在を意味した。とすれば、生物の質料的側面（心身の対で言えば身体の側）は、少なくとも「自然的物体である」という特徴づけがされた場合には、元素の作用を基礎とする純粋に物理的な事柄として、形相的自然への言及抜きに語り得るものであると思われる。実際アリストテレスは、質料的原理を自然的生成において

軽視していない。確かに彼の自然観は目的論的であり、動物学著作では動物の発生様式や器官の特徴などの解明に、種形的形相の存続と機能概念を核とする説明を駆使する。即ちそこでの説明は、部分が当該生物の生存のため生成し一定の機能を持つとするものであり、一連の目的性は種形的形相の獲得と存続に収斂される。ただ興味深いのは、彼は機能的説明を駆使しつつも、一定機能を持つ部分について、元素の作用により必然的にもたらされたという主旨の物理的説明も同時に行なう点である。例えば、鳥の嘴と蹴爪はそれぞれ食物摂取と防御機能を担う一方で、それらは体内を循環する土質が嘴は上方へ蹴爪は下方へ蓄積されるという仕方です。「発生の過程で必然的に (ex unanimes)」生じた、と説明される (P.A. Δ12, 693a10-694a27)。『自然学』ではこの必然性は、「これこれの比の元素が過程の始点にあれば必然的にこの終点が帰結する」という仕方です。され、事象を純粹に質料的側面において捉える限りで認められるとされる (B9, 198b12-14, B9, 200a5-10)。以上を念頭に置けば、身体理解に関し次の点が見出されると思われる。即ち、前提Cにおける生物の二分節、および「自然的物体」という表現の存する視点を考慮するとき、彼の身体概念は、少なくともそうした分節の場面では純粹に物理的な「物質 (body)」として捉えられ得るということである。よって彼の身体理解は、心身問題をめぐる現代的議論への参与を端的に阻むわけではない。そしてこうした身体||質料理解に立つときには、生物||結合体の存在は、形相的原理への言及抜きに、元素の作用によるものとして純粹に物理化学的な仕方です (言わばボトムアップ的に) 特徴づけられ得ると思われる。当時の元素理論は近代的自然科学とは隔世のものではあるが、事象の記述に関する基本的態度は連続線上にあると解することは誤りでないだろう。

4 organikon な身体

さて、こうした身体理解を踏まえつつ、魂の定義で提示される身体理解に目をやりたい。定義にいたる道行きは、魂

はいずれの実体に相当するのかという問のもと、O1でもO3でもなくO2に他ならないとされるものであり、辿り着いたのが「魂 $\parallel$ 形相 $\parallel$ 知識の所有状態に比せられる完成態」という同定だった。

Def.A: $\Psi \parallel$ 可能態において生命を有する自然的物体の、形相としての実体

Def.B: $\Psi \parallel$ 可能態において生命を有する自然的物体の、E1としての完成態

そして次に、「可能態において生命を有する」自然的物体が「organikonな」それと同定され、

Def.C: $\Phi \parallel$ organikonな自然的物体の、E1としての完成態

が最終的に導かれる。さて、これらの定義で「魂 $\parallel$ 形相（完成態）」という定式が導かれること自体は、議論の流れからすれば当然だろう。だが注意すべきは、身体側の特徴づけられ方である。「魂 $\parallel$ 形相（完成態）」の対は当然「身体 $\parallel$ 質料（可能態）」であると考えられ、事実そうした定式が後に示される（B2, 414a14-19, cf. B1, 413a2-3）。よってこれらの定義では魂に対応する身体（質料）は、Def.A, Bでは「可能態において生命を有する」自然的物体と表現され、それがDef.Cで「organikonな」それと同定される。果たしてこれらの特徴的表現によって捉えられる身体理解は如何なるものなのか。それは少なくとも、前提Cで捉えられた純粋な「自然的物体」としての身体理解とは、特徴づけの仕方を異にするように思われる。その異なりが端的に現れ、そこでの身体理解を探る鍵となると思われる表現、それはorganikonという表現である。前提A $\sim$ Cでは顔を見せなかったこの表現はDef.A, Bで定位された身体概念を換言的に説明するものである以上、この表現の内実を確定することが、定義における身体理解を探るための最重要事項であると思

われる。

では、この *organikon* という表現は何を意味するのか。私が訳語を留保してきたのは、まさにそれが解釈上問題となるからである。こゝで言われる *organikon* (*physikon*) *sāma* は従来の解釈の大勢としては、「器官を有する（器官から構成された）身体」を意味すると解されてきた。⁵ こうした理解は、動植物の身体が現にそうである——即ち生物の身体全体は器官を有している——ことを表す事実言明、或いは如何に単純でも器官から構成されていればそれは生物の身体であるという条件的言明として、当の箇所を了解するものであると思われる。確かに、この言明の直後でアリストテレスは植物の諸部分である葉、鞘、根を例示しているし、また、*organikon* の末裔である英語 *organic* からの廻行的理解からすると、「有機的身体」といった幾分曖昧な訳語も可能であろう。しかし、である。こうした理解はともすればギリシア語 *organikon* の語義から或るすれを引き起こしかねない。というのも少なくとも語義上は、*organon* は「道具」を意味し、*organikon* は「道具 (*organon*) ・ 的 (-*ikon*)」であることを意味するからである。とすれば、*organikon* を「器官的」と訳すことはまだしも、少なくとも「くを持つ」という訳語はやや飛躍的な感を拭えない。むしろこの表現は、その語義に則して自然な仕方で見れば、「可能態において生命を有する自然的物体」の存在様式を、技術品である道具の存在様式（道具が有する諸特徴）から類比的に——別言すれば、（異同両面を含め）技術品との比較・距離測定という仕方——特徴づけようとするものであると思われる。よってその存在様式も、まさに当の類比の内実（何と何が如何なる点で類比・比較されているのか）を汲み取ることと適切に了解されると思われる。確かに、*organikon* に「器官的」という表現を附すこと自体を排除する必要はないが、ただし、そこで言う「器官的」という特徴づけはそもそも「道具」のあり方との類比・比較によって導入されたものである、ということは無視できないであろう。（こうした意味で「道具的」という訳語も考えられるが、道具と身体が全面的に親近的であるという印象を与えかねないため、私としては慣例も踏まえ「器官的」という表現を否定しない。）私のこうした理解（道具からの類比説）は、B 4 で魂が目的因とし

て原理的に位置づけられる際、「すべての自然的物体は魂の道具 (organa) である」と明言される点に注目すれば (415b18-20)、テキスト上根拠づけられよう。この箇所で言われる「自然的物体」は「動物のそれ」と「植物のそれ」に限定されていることからして、生物の身体 (可能的に生命をもつ自然的物体) のみを指すことは明らかである。よってこの言明は、「organikon な自然的物体」という表現が「道具の存在様式から類比的に理解できる」ことを表明するものである、ということを示している。

では、この「道具からの類比」の内実を検討しよう。一般に「道具」とは、制作上の目的を然るべく遂行する手段として開発された技術品を指す。そして何かがまさに「道具としてある」とは、当該目的実現の最も有効な手段として機能することである。彼がその思索の中で頻繁に挙げる大工道具で言えば、鋸は木材の切断を目的とする技術品であり、しかもこの目的 (機能) の実現に最も有効な特定の形態・特徴を有した技術品である (cf. *Phy. B9*, 200a10-15)。彼は、何かが「道具としてある」ことのこうした基本様式をおそらく踏まえつつ、「可能的に生命を有する」自然的物体が *organikon* であることの一例として、葉、鞘、根、口を列挙する (412b14)。即ち、葉は鞘の、鞘は果実の覆いとして、根と口は栄養摂取の器官として機能する部分である。これらから解るように、類比の (特に連続性に関する) ポイントとなると考えられるのは、(1) 道具と身体に見出される機能 (function) 概念、(2) および機能実現の最も有効な手段という知見である。これを類比図式に当てはめれば、〈道具〉と〈道具の機能〉に見られる関係が〈身体部分〉と〈身体部分における機能〉にも見られる、ということになる。なお『氣象論』Δ12でも、同名異義原理が提示される中で、目と鋸について各機能に着目する仕方で類比的議論が登場する (389b28-390b2)。

ところで今挙げられた例は身体部分である。しかし注意すべきは、アリストテレスはB1の一連の議論や『動物部分論』において、身体部分について言えることを全体に当てはめ (412b22-23) かつ全体に言えることを部分にも当てはめて論じ (412b17-18)、身体全体の存在様式と部分のそれを並行的・互換的に把握可能としかつ把握すべきとしている

点である。従来、*organikon*という表現の類比的性格に注目した読みは時折提示されてきたが、その多くは、身体部分に特化してこの表現を捉え、部分（器官）が道具のあり方から類比的に理解されることのみを意味すると解してきたように思われる。例えばエヴァーソンは、*organikon*を*instrumental*とする理解を提示しつつも、結局 *organikon schema* を身体部分を指すものと解している（なお彼はこの見解に独自の徹底化を施し、そもそも「身体」を身体全体ではなく部分を指すもの、「魂」を部分の能力を指すものと解し、身体全体に対する統一的な魂は端的には存在しないとする主張を提示する⁶）。しかし、アリストテレスはB1の一連の議論で身体部分の様式と身体全体のそれを一貫して同列的に論じているし、また、メンも指摘するように、『動物部分論』A1でも、動物の身体全体を*organon*と表現ししかも部分と全体を並行的に論じる箇所（982a21-3）が見られる（なおメンも道具類比説をとるが、機能概念が類比の焦点であることを幾分不当に軽視しているように思われる⁷）。またB4では、あくまで魂に対する身体の関係について道具概念が明示的に提示されている。よって、当然魂と身体全体の間においてもこの類比が適用されると考えるべきだし、身体部分についても、それが*organikon*と特徴づけられるのは身体全体に対する関係を表したのではなく、まさに機能という概念が見出されることを示したものであると思われる。以上を踏まえつつ類比の内実を定式化すれば、次のように表せよう。

〈道具（e.g. 鋸）：機能（e.g. 切断機能）〉＝
〈身体部分（e.g. 根）：部分の機能（e.g. 栄養摂取能力）〉＝〈身体全体…魂〉

この類比図式に則せば、身体全体および部分が「*organikon*である」（道具のあり方から類比的に理解される）とは、それが鋸の場合のように当該目的の実現に最も有効な機能を備えていることを意味すると思われる。すると今、前節の

議論との対比において次のようにアリストテレスの身体概念を理解できよう。即ち、「可能的に生命を有する」即ち「organikon な自然的物体」として特徴づけられる場面での身体概念は、前提Cにおける元素を基本とする質料理解の視点とは異なり、当該形相に直接対応しそれを構成する（そして当該機能の実現に最も適したあり方をした）質料として身体を捉える、という視点において語られるものである。そしてそうした身体が「可能的にある」とは、当の身体が当の形相を（即ち魂の内在状態を）直接実現し得る質料（最近質料）であることを意味すると思われる。以上を理解するには、部分を生物とする仮想を行いながら魂と身体の関係の説明する箇所が注目される。即ち彼は、仮に眼を動物とした場合それを物理的に構成する瞳が質料（身体）であり眼の機能（視力）が形相（魂）に相当すると述べ、機能に着目する仕方では魂を特徴づける知見を提示する（412b18-22, b27-413a2）。とすれば、形相を直接構成し実現し得る最近質料として身体を理解するならば、身体の類比的特徴づけは、身体が生ずる機能に直接対応しそれを実現し得る構造を持つということの意味すると思われる。このように捉えられた身体においては、魂と身体の関係は、それらが一なるか否かの詮議を要しない、事実上同一関係にあると主張される（412b6-9）。そしてその同一性は、封蠟における蠟と印形の関係、即ち現に一定の形をした封蠟において蠟と印形が一なるものとしてあるという事態から類比的に理解される。このように、定義における身体概念は、魂との実質的同一性が見出されるほどに、生の諸機能を直接実現させるものとして捉えられ、そして対応する「魂の」身体（即ち「形相の」質料）としてのみ位置づけられると思われる。即ち、同一性の根拠は形相（完成態）の側にあると言われるように（412b8-9）、身体は、それが形相に直接対応し形相と同一性を確保するにしても（即ち現に生きていても）、あくまで「生き続ける」ことに關しては可能性の次元にあり続けると言えよう。

この同一性言明を踏まえつつ、身体以上の類比的特徴づけの内実に再び目をやるとき、感覚の構造について一般的に論じたB12の議論からも注目点が見出される。即ちそこでは、「感覚される形相を質料抜きで受け入れること」であるとする感覚の一般的定義がなされた後、感覚器官と感覚の関係について興味深い見解が提示される（424a17-28）。即

ちアリストテレスは、感覚（いわば感官の魂）を感覚器官の能力として位置づけつつ、感官とは「そうした能力が内在するもの」であり一定の定量的物体である一方、感覚とは当の感覚能力（機能）のことであり、（感官そのものではなく）感官の物理的状態の一定の「比（logos）」であるとする知見を提示している⁸。そしてさらに、両者はこのようにそのあり方（本質）は異なるが存在としては事実上同一である、と主張される。今、解釈上議論の多い感覚の定義の問題には立ち入らないが、少なくともB1における身体の類比的特徴づけと心身同一性言明に留意する限り、この主張から次のことが汲み取られるように思われる。即ち、感官の一定の物理的状态はまさに一定の比において当の機能を実現しているのであって、器官と感覚（全体レベルに置換すれば身体と魂）はそうした仕方です実上同一である、ということである。ただし、感官と感覚は「その本質は異なる」と言われるように、当の比が生の機能としてある（役立っている）という事態そのものは、感官の定量的・物理的状态に還元される仕方です説明され得ず、一連の目的論的（機能的）説明が当の器官の本質を開示するものとして不可避であると考えられる。

5 同名異義原理

今や、当初の難問は解決できよう。同名異義原理（homonymy principle）とは、生物の身体或いは器官は現に生きている場合にそう呼ばれ、魂を欠く身体、視力を欠く眼は同名異義的にしかそう呼ばれ得ないというものだった（412b20-22）。そしてこのことは、斧はその本質（切断能力）を捨象すれば同名異義的にしか「斧」と呼ばれないという事態から類比的に提示される（412b12-15）。だがこの原理は、魂の定義で身体が可能態と位置づけられることと一見両立しない。即ちアクリルらが指摘するように、身体が「可能態」であるとは、そもそも質料としてのそれが現実化している（生命をもつ）こともそうでないことも共にあり得る（即ち「可能である」とはあることもあらぬこともある

ことを含意する) からこそ、そう言われるはずである。¹⁰そして、生きているものとしてしかあり得ない身体概念(常に形相づけられた身体理解)は、近代的物体概念からすれば極めて異質である。それは、バーニエトの抱くような「意識を懐胎している」という印象を与えかねない。¹¹もし彼の身体概念が本来的に特異だとすれば、それを現代的文脈で語ることは自体に無理が生じることになる。ともあれ難問の解決の焦点は、彼の魂論における身体(質料)概念が如何なるあり方をし、しかもそれが「可能態」であるとは如何なる意味においてかということである。

まず、難問の一帰結としての当惑、即ち彼の身体概念を端的に特異とする見方に対しては、第3節を振り返ればこう答えられよう。即ち、彼の身体理解には、DefCで示されるように魂に直接対応する直近質料として身体が捉えられる場面がある一方で、前提Cに見られるように、身体が元素の自然本性を基礎とする、形相に言及しない純粹に物理化学的な「物質」として捉えられる場面が存在する。少なくとも後者の存在は、身体を総じて形相づけられたものとする一般化に対する反例となる。ただし、これは難問からの帰結に対する応答であるから、難問自体に対しては、「可能態」という身体の特徴づけと同名異義原理との整合性を探る必要がある。

一連の議論を再確認する。ここでは実体の区分(前提A)の提示後、諸前提を経て、魂は「可能態において生命をもつ自然的物体の形相」にして「第一完成態」であり、身体は道具の存在様式から類比的に理解されるとされ、DefCからの帰結として魂と身体の一性が主張された。以上から注目されるのは、前提Aは彼の存在論・実体論における基本的立場の一般的提示であり、しかも魂と身体の一性の主張は、形相と質料の一性という一般的文脈を想起させる、ということである。即ち、魂の定義における彼の大きな問題関心として、魂と身体の存在論的關係の定位という試みが見出される。彼は、質料たる身体と形相たる魂は封蝋における蠟と印形のように一なるものであり、一性の根拠は完成態の側に存するとする(412b6-9)。ここで想起されるのが、結合体における質料と形相の一性を、定義の一性の問を経由して問う、『形而上学』H6の議論である。彼はそこで、定義を類一種差連関で捉える伝統に倣いつつ、類を質料、種差を

形相に置き換えた上で、定義には質料の説明と形相の説明という複数部分があるのに何故に一つの定義と言えるのか、という問題を探る。結論的に示されるのは、最近質料と形相は、前者は可能態において後者は現実態において同一であるから、一性の問題は解決されるという主張である(10f5a24-25, a30-33, b17-19)。H 6の検討は本稿の範囲を超えるが、今の文脈との関連に限って言えば、H 6における可能態—現実態図式は、「無が有に成る」という矛盾を秘める生成を整合的に——「可能的に在るものから現実的に在るものが生成する」(cf. A2, 1069b18-20)という仕方——説明する装置として導入されたというよりもむしろ、共時的視点から捉えられた結合実体について、最近質料と形相の不可離性および両者の存在論的序列が表明されたものということである(cf. 10f, 1049a19-24)。即ちそれは、今ここに在る結合実体の存在論的分析であり、形相と最近質料が同一性を確保しながらもその存在・一性の根拠は形相の側にあり、質料はその可能性の次元に留まり続けるということを含意すると思われる。そのさい質料は、当の結合実体に成り得る(形相を獲得し得る)という意味での可能態(生成の可能態)としてよりもむしろ、現に在る結合体を構成する最近質料としてあり、しかも形相存続の可能性を保持し続けるもの(存続の可能態)として位置づけられることが解る。

『デ・アニマ』に戻る。一連の議論は存在論における基本的立場の表明を含み、魂と身体の一性の提示は形相と質料の一性テーゼの典型的応用であった。また魂を完成態として特徴づけるさいには、魂は実際の活動(考察に比せられるそれⅡ第2節で示したE2)ではなく、当該能力の所有状態(知識に比せられるそれⅡE1)を意味することが強調された。これらを鑑みれば、魂の定義における彼の基本的関心、および「身体Ⅱ可能態」という特徴づけの内実が看取される。即ち魂の定義は、「形相実現の潜在能力を持つものが発現する」といった生成的(通時的)観点から語られるものではなく、現に存在している生物に関し、共時的観点からその存在構造を「質料—形相」そして「可能態—完成態」という枠組みに基づいて分節し、そうして分節された魂と身体と存在論的關係を定位する試みであると思われる。それ

は、共時的レベルにおける可能態——現実態論の、身体——魂関係への典型的適用でもある。以上を「可能態」という身体の特徴づけに着目して説明すればどうなるか。アリストテレスは、魂（形相）と身体（最近質料）が同一性を確保するとしつつもその根拠を完成態（魂）の側に求める。それは、当の生物が現に生物として在る限り身体は魂と一なるものとして生きているが、ただしその身体は「生き続ける」ことについてはあくまで可能性の次元にあり（即ち生き続けることも生き続けないこともあり得）、存続の根拠は生命原理としての魂の側にあるからであると思われる。即ちそこで言われる「可能態」とは、「生まれることも生まれなこともあり得る」という生成的観点ではなく、生の存続の可能態という観点におけるものであることが解る。こうした身体理解は同名異義原理と矛盾しない。同名異義原理が語る通り、魂に直接対応し機能を構成する最近質料としての身体（或いは器官）は、「生きていない」とき、即ち対応する形相（機能）を欠くとき、もはや当の形相の質料ではあり得ない。というのも、生物が生命原理を欠くとき身体は自らで同一性を維持し続けられないからである。最近質料はそもそも、「この形相の質料」という仕方、直接対応する形相への言及によってのみ語り得る。逆に言えば、質料は最近質料として捉えられるときは常に形相の現在を事実として伴う。ただし身体は、最近質料としてある間は現に生きているにしても、生の存続に関しては可能性の次元にある。以上のように考えれば、身体が「常に現に生きている」と同時に「可能態」であるという事態を整合的に理解できよう。

6 おわりに

以上のように、最近質料としての身体は、現に在る生物についての存在論的分節の中で、形相と同一性を保持しながらも生の存続については可能性の次元において語られる意味で「可能態」と特徴づけられる。それは同名異義原理と矛盾せず、むしろどちらも、〈形相——最近質料〉関係についての一般的教説の典型的応用として捉えられる。ここでは身

体は、*organikon* という表現により道具のあり方から類比的に特徴づけられ、一定目的を実現する機能を備えた一定の物理的狀態にある質料として捉えられた。一方で、アリストテレスにはもう一つの身体理解が存在していた。即ち定義にいたる諸前提の分析で見たように、「生命を有する（魂が内在する）」という形相的側面と「自然的物体である」という質料的側面への生物の分節においては、身体は、元素を基礎原理とする「質料的自然」に属するものとして、即ち純粹に物理的な事象（body）として捉えられていた。この意味での身体（質料）理解に立つときには生物の存在は、形相的原理への言及抜きに純粹に物理化学的な仕方の特徴づけられ記述され得ると考えられる。

このように彼の身体理解には二つの視点が見出されるが、最後に注記すべきことがある。即ち、形相を直接構成する最近質料としての「自然的物体」と、元素を基本とする物理化学的事象としての「自然的物体」は、断絶的ではないということである。即ちへ魂—身体全体—異質部分—等質部分—元素—という形相—最近質料関係の連続的構図からすれば、最近質料としての身体も、究極的には元素の本性と相互作用を基本原理とし、質料的にはそれらから実現されると考えられる。このことは、心身問題の文脈を念頭に置けば、如何なる心的状態にも身体的・生理的過程が対応し、物理的にはそれにより実現される、という立場を示唆する。そしてこの立場は、感官と感覚を事実上同一とし感覚を一定の「比」と捉えるB12の言明からも伺える。即ちそこでは、当該の比は器官の一定の質料的状态によつて物理的に実現される——一般化すれば身体と魂はそうした仕方で同一性を保持する——ものであると思われる。以上の立場は、一定の物理主義的・一元論的ラインに位置すると言えよう。ただし、感覚と感官の「あり方は異なる」とも言われたように、当の比が生機能としてあるという事態そのものは感官の物理的状态に還元する仕方では説明され得ず、一連の目的論的説明が不可避となる。また諸機能・生の存続に関しては身体はあくまで可能性の次元に留まり、魂と身体の間にある一定の存在論的身分の差違が確保されていると思われる。その意味で、彼は当然ながら強い一元論には与しない。

ところで、私の解釈を近年のアリストテレス解釈上の趨勢である機能主義的解釈にコミットするものと見なすことは

容易いし、「的」という留保付きならそれは誤りではなからう。ただし真に見定めるべきは、アリストテレスの立場が機能主義的ラインにあるとすればそれはそうしたラインの如何なるヴァリエーションとして位置づけられ、また現状に問題提起をなし得るのか、ということであろう。しかしそれには、感覚と理性に関し彼が展開する各論における心身の位置づけの精査という、本稿の範囲を超える作業を要する。また、本稿では身体のある方を技術からの類比（テクネーアナロジー）により提示する彼の策に関し、技術と自然の連続的側面に特に注目しつつ同名異義原理の解決案を提示したが、しかし心身論という一般的文脈で彼の立場の内実をより詳細に確定するには、両者の差異の側面にも深く踏み込むことが求められよう。これらは今後の作業とするが、論を閉じるにあたり、類比という方策に関して次のことを展望的に付言しておきたい。テクネーアナロジーによる身体概念の提示は、身体のある方が技術という我々の営みからの距離測定・比較という仕方で理解されるものであることを示している。このことは、自然理解に関する我々の認識論的制約とも言えよう。ただし注意したいのは、この類比という営みはまさに類比であって単に類似を示す作業ではなく、連続性と差異性の両面において実行し得るということである。また、もしこうした認識論的制約がアリストテレスにおいて想定されているとしても、それは必ずしも存在論的なレヴェルにおける何らか別の仕方での序列の存在を原理的に排除するわけではない、ということも示唆しておきたい。

註

著作名の略号は以下の通り。 De An.: 『デ・アニマ』 Phy.: 『自然学』 G.A.: 『動物発生論』 P.A.: 『動物部分論』 Met.: 『形而上学』 Meteor.: 『氣象論』

¹ M. Nussbaum & H. Putnam, 'Changing Aristotle's Mind', in *Essays on Aristotle's De Anima*, M. C. Nussbaum and A. O. Rorty (eds.),

Oxford, 1992, pp.27-56.

2 M. Burnyeat, 'Is an Aristotelian Philosophy of Mind Still Credible? (A Draft)', in *Essays on Aristotle's De Anima*, pp.15-26.

3 J. Ackrill, 'Aristotle's Definitions of *Psychē*', *Proceedings of the Aristotelian Society*, 73, 1972-3, pp.119-33.

4 茶谷直人「アリストテレス『デ・アニマ』B巻第一章における魂の定義と同名異義原理」『文化學年報』神戸大学大学院文化学研究科、2006) pp.97-119.

5 e.g. Ackrill, *op.cit.*

6 S. Everson, *Aristotle on Perception*, Oxford, 1997, pp. 60-69.

7 メンは、[△]魂・身体[△]が[△]技術・道具[△]に類比的であるとし、ポイントを次の二点に見出す。魂と身体、技術と道具はそれぞれ、(1)前者が後者を「用いる」という関係にあり、しかも(2)前者は後者によって「動かされない」という関係にある。(2)については、定規は測量の際、対象の側に置かれるといった付帯的運動をするものの定規自体は作用を受けないのと同様に、感覚においても、感覚器官は対象による一定の付帯的作用を受けるものの感覚能力自体は当の器官によって作用を受けないとされる。知覚における魂のありようを説明する手だてとして「道具からの類比」に着目するという彼の試み自体は興味深い方法であると思われる。ただし、少なくともB1において身体に附された*organikon*という特徴づけは、一連の文脈で栄養摂取器官(口、根)や斧が例示される以上、機能概念を類比のポイントとみるのが自然であるし、少なくとも機能概念を無視しては理解不可能であろう。S. Menn, 'Aristotle's Definition of Soul and The Programme of The *De Anima*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, v.22, Oxford, 2002, pp.83-139.

8 アリストテレスにおいて*logos*は通常「説明言表」を意味するが、比・比例として理解する場面も散見される(c.f. P.A. Al, 642a18-24)°。

9 石像や描かれた眼(412b21-22)や、木像の鋸(*Meteo*, Δ12, 390a13)なども例示される°。

10 Ackrill, *op.cit.*

11 Burnyeat, *op.cit.* 彼はB12における知覚の定義の解釈との関連で、同名異義原理は器官などの質料が「本質的に生き、本質的に意識を伴い得る」ことの表明であると解し、デカルト以降における身体概念との乖離は、アリストテレスの議論が現代的な心身問

題の文脈と同列に論じるに値しないことを意味すると主張する。

- 12 B 1で一箇所、種子や種子を擁する果実が「可能態」であると言われる場面があるのはどう解すべきか(412b25-27)、という反論がある。これに関しては、種子は形相(魂)に対する可能態(身体)としてではなく、可能的に生命を持つ物体であることの可能性をもつもの(即ち「身体に成る可能態」或いは「可能態の可能態」として特徴づけられていることに注意すればよい。即ちこの箇所は、魂の定義において提示される「身体 $\parallel$ 可能態」という図式とは基本的に異なる次元で語られている。

- 13 T. Irwin, 'Aristotle's philosophy of mind', in *Companions to Ancient Thought 2 Psychology*, S. Everson (ed), Cambridge, 1991, pp.56-83, C. Shields, 'The First Functionalist', in *Historical Foundations of Cognitive Science*, J-C. Smith (ed), Kluwer Academic Publishers, 1990, pp.19-33.

[付記] 本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

Aristotle's Conception of Body (*Physikon Soma*) in *De Anima* B1

Naoto CHATANI

In *De Anima* B1, Aristotle characterizes body as potentiality, but then he maintains 'homonymy principle,' which means that body is as such only when it is actually living. In this paper, through considering this aporia, I showed the following. i) Potentiality in this context means possibility of continued existence of organism, so it consists with body's actual living. ii) He has two contrasting perspectives about body. According to his thought, body is purely physical, meanwhile it is virtually identical with soul. iii) These two perspectives being connected, his conception of body is situated at a kind of materialistic line.